博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　早 津 恵 美 子

学位申請者　　李　善 姫

論　文　名　　日本語の移動動詞の研究

【審査結果】

本学位請求論文は、現代日本語の移動動詞の語彙・文法的な性質について実証的に論述したものである。審査委員会は、論文審査と最終審査（公開口述審査）の結果にもとづき、審査委員全員一致で、学位申請者に対して、博士（学術）の学位を授与するのが適切であるという結論にいたった。

なお、審査委員会は、早津恵美子を主査に、副査として、学外から森山卓郎氏（現代日本語文法論、京都教育大学教授）、学内から高垣敏博教授、野間秀樹教授、川村大准教授の三氏を加えた５名で構成された。

【論文の概要】

本論文は、日本語の移動動詞について、動詞の語彙的な意味と文法的な性質との関わりを実証的な方法で明らかにしたものである。まず、移動動詞と場所名詞との文法的な結合タイプを数量的に検証することによって移動動詞を分類し（１章）、それをさらに場所名詞の文法的な意味の面から再検討することによって、移動動詞を五種六類に分類するとともに、移動動詞全体を通じて７つの範疇的意味および移動構造をとりだし、個々の移動動詞の語彙的な意味にはそれらの一つ以上が備わっているとする（２章）。そして、その７つの範疇的な意味は、虚構的移動表現の類型（３章）、複文における前件-後件の出来事間の意味的関係のあり方（４章）、広義複合動詞における前項-後項の関係の様相（５章）などを生み出し支えるものとして機能していることを論証する。さらに、こういった考察によって明らかになった個々の動詞の語彙的意味を辞書の意味記述に生かすべくその試案が提出される（６章）。

日本語学の研究史において、移動動詞については様々な理論的立場から多くの研究がなされており成果が蓄積されている。本稿において実証的に確かめられた言語事実のうちには従来の研究のなかですでに指摘されているものもある。しかしながら、個々別々に論じられることの多かった言語事象に対して、範疇的意味という概念を積極的に用いて分析考察することで、諸現象間の関連を明瞭にすることができ、それによって個々の移動動詞の語彙的な意味の多義性や動詞間の意味の異同を闡明しえたことは、本稿の大きな成果であり、移動動詞研究に寄与するものである。

【各章の内容】

本論文は序章と六つの章で構成されている。

序章では、研究目的（移動動詞の語彙的な意味とくに範疇的意味を明らかにし、それと文法的な性質との関わりを実証的な方法で明らかにすること）が述べられたあと、移動動詞についての先行諸研究の３つの立場（意味特徴・成分分析による分析、構文特徴・格支配による分析、認知的観点からの分析）が紹介される。そして、本論文の方法論すなわち、移動動詞の語彙的意味を客観的な手続きによって明らかにするために大量のコーパスを資料として、移動の出発点・到着点・経由点などを表す場所名詞と移動動詞との結合頻度を調査し、それに基づいて実証的に分析考察を行うこと、そしてその際に「範疇的意味」という概念を援用することが述べられる。「範疇的意味」とは、奥田靖雄(1979)「意味と機能」における「カテゴリカルな意味」、仁田義雄(1982)「語彙と文法」における「範疇的意義」という概念をもとに本論文の筆者によって「一連の単語の語彙的意味における共通する意味の側面、つまり同じ語彙的意味の側面をもつものとしてグループ化できる、一般化して取り出した意味」(p.1)と定義される概念である。

そして、考察対象を 45 動詞とすること、資料とするコーパスが 1945 年～1991 年に発表された文学作品 51 作品で、延べ 21,849 例の実例について考察することが説明される。

第１章〔移動動詞の格結合分布〕では、移動動詞と場所名詞との結合の実態が調査される。21,849 の実例について、移動体が有情物であるものと無情物であるものとに分けて、カラ格・ヲ格・ニ格・ヘ格・マデ格の場所名詞と移動動詞の組み合わせの頻度が調べられる。それによって、動詞によって何格の場所名詞と組み合わさるかの頻度に異なりがあることが示され（たとえば「こえる」は約 94％がヲ格名詞との、「着く」は約 70％がニ格名詞との結合）、結合頻度の高い格形式が何であるかにもとづいて、45 語の移動動詞が、有情物移動体の場合は３類に、無情物移動体の場合は６類に分けられる。

第２章〔空間的移動表現－場所名詞句との結合頻度からみる範疇的意味〕では、第１章の調査結果をもとに、当該の場所名詞の文中での文法的な意味（出発点、経過点［経由点と経路に細分］、到着点、方向、目的地）に注目して移動動詞が再分類される。たとえば、「部屋｛を／から｝でる」のヲ格・カラ格名詞は、形式は異なるもののいずれも「出発点」を表すというように再整理をし、45 の移動動詞を、どのような文法的な意味の名詞と最も高い頻度で組み合わさるかによって五種六類に分類する。〈出発志向動詞（４動詞）〉、〈経過志向動詞（〈経由志向動詞（7）〉と〈経路志向動詞（14）〉に細分）〉、〈到着志向動詞（16）〉、〈目的地志向動詞（1）〉、〈方向志向動詞（3）〉である。そして、分類にいたる考察のなかで、移動動詞全体を通じて７つの範疇的意味（“出発の位置変化”“経由動作”“経路動作”“到着の位置変化”“目的地への移動”“ある方向への移動”“様態”）をとりだし、それぞれの範疇的意味にふさわしい構文的特徴をもつ「移動構造」が提案される。また、個々の移動動詞の語彙的な意味には範疇的意味の一つ以上が備わっているとされる。たとえば、「越える」には“経由動作”のみが、「おりる」には“出発の位置変化”と“到着の位置変化”が、「すすむ」には“経路動作”と“ある方向への移

動”と“様態”がとりだせるなどである。

そして、本章で結合頻度に注目してとりだしたこれらの範疇的意味は、３章以降で考察する文法現象を支えるものであり、その観点から考察が進められるという。

第３章〔虚構的移動表現〕では、移動動詞が人や物の具体的な位置変化を表すのではないものを「虚構的移動表現」として、その性質と類型が考察される。Talmy(1996) *Fictive motion in language and “ception”*、松本(1997)「空間移動の言語表現とその拡張」を批判的に検討しつつ、実例の観察にもとづいて、虚構的移動表現に二種三類の構文的なタイプを見出している。〈場所主体虚構移動表現〉（「細い道が学校の前を走る」）、〈一般者主体虚構移動表現〉（〈経過点描写表現〉（「一階におりる階段」）と〈到達経過表現〉（「坂をくだったところにお店がある」）に細分）である。そして、各表現になりやすい動詞の範疇的意味を考察し、場所主体虚構移動表現となるのは“経由動作”または“経路動作”という範疇的意味をもつ動詞の場合が多く、一般者主体虚構移動表現となるのは“到着の位置変化”と“経由動作”または、“到着の位置変化”と“経路動作”というそれぞれ二つの範疇的意味を合わせもつ動詞（「二側面動詞」）の場合が多いことが明らかにされる。また、一般者主体虚構移動表現の詳しい考察を通じて、第２章で経過志向動詞を経由志向動詞と経路志向動詞とに下位分類した意義が確かめられている。

第４章〔複文における出来事間の意味的関係〕では、移動動詞を従属節述語とする複文、とくに前件と後件とが継起関係を表す２つのタイプの複文が考察対象とされ、そういった複文における前件と後件の意味的な関係にも移動動詞の範疇的意味が反映されることが明らかにされる。まず、従属節述語が「シテ」形である複文では、前件の後件に対する構文意味的な関係は、当該の移動動詞がどのような範疇的意味をもつかによって、〈状態〉（「窓から<u>離れて</u>たっている」）、〈空間的経過〉（「引き戸を<u>くぐって</u>外にでる」）、〈状況〉（「通りを<u>歩いて</u>、ふとこう思った」）、〈場所提示〉（「家に<u>帰って</u>ねる」）、〈方向〉（「お堂に<u>向かって</u>登っていく」）、〈移動様態〉（「<u>歩いて</u>映画館に行く」）になるとされる。次に、従属節述語が「スルト／スレバ／シタラ」形の複文においても、前件の後件に対する構文意味的な関係には、上述の移動構造のタイプおよび動詞の範疇的意味が概略においてかかわっており、〈移動動作・位置変化の完了〉（「住宅街を抜けると、大きな通りがある」「ロビーに出ると、人がいっぱいだった」）、〈移動動作の過程〉（「山道を歩くと、あちらこちらに碑石があった」）、〈後件の発生原因となる動作の成立〉（「歩くと、コツコツ音がした」）という関係がみいだされるという。

第５章〔複合動詞〕では、前項が移動動詞である広義複合動詞について語構成および意味（主としてアスペクト的な意味）が考察され、この面においても、概略としては移動動詞の範疇的意味が関係することが示される。まず「移動動詞連用形＋移動動詞」タイプには、前項動詞が“様態”“経由”で後項動詞が“出発/到着の位置変化”であるものが多い（「かけもどる、たどりつく」）という傾向が顕著である。 次に「移動動詞連用形＋ハジメル／ツヅケル」タイプでは、たとえば前項動詞が“経路”である複合動詞は、動きの開始／継続というアスペクト的な意味を表し（「坂をくだりはじめる」「山道を歩き続ける」）、

前項動詞が“到着の位置変化”である複合動詞は反復性が表される(「店に行き始める」「店に行き続ける」)といった特徴がみられる。そして、「移動動詞テ形＋イク／クル」タイプの複合動詞については、前項動詞が“様態”であることが多く(「歩いていく／歩いてくる」)、後項動詞「イク／クル」がどのような様態での移動なのかを表していることが数量的に確認される。

第6章〔辞書の意味記述と用例の問題〕は、第5章までの考察結果をもとに、本論文で考察対象とした45語の移動動詞について辞書的な意味記述の試案が示される。まず、現行の国語辞書4冊(『広辞苑』『新明解国語辞典』『岩波国語辞典』『日本語基本動詞用法辞典』)の意味記述や用例における問題点が具体的に検討される。そして、個々の移動動詞ごとに、語彙的意味を記し、代表的な文型を共起する名詞や副詞の範疇的な意味とともに示し、さらに簡単な文例も挙げられている。日本語学習者とくに中・上級の学習者の学習効果を高めることが配慮されたという。

【論文の講評】

本論文の内容について高く評価できるのは次のような点である。

(1) 大量のデータをもとに言語事実を丹念に観察し、細かい事実をないがしろにせずに全編にわって丁寧で綿密な記述がなされている。その結果、個別動詞の語彙的な意味においても、また、扱われている文法現象の性質についても、従来の研究で気づかれていなかった知見がいくつも明らかにされている。

(2) 第1章の調査・分析は、宮島達夫(1986)「格支配の量的側面」に倣ったものであり、概略として宮島と同様の傾向が確かめられたのであるが、宮島が1956年発行の雑誌を調査資料にしているのに対して、本論文では1945年から1991年発表の文学作品が対象にされており、対象とする用例数も約8倍であるなど、本論文の意義は大きい。

(3) 移動動詞の分類に際して本論文でとられた方法の特筆すべき点は、その動詞がどんな文法的意味の場所名詞とどんな頻度で組み合わさるかという数量的な基準に徹底的にもとづいてなされていることである。大量の用例をもとにしたこのような移動動詞分類は従来なされておらず、提案される五種六類の分類はきわめて興味深いものとなっている。

(4) 移動動詞45語について、本論文の考察結果を生かし、統一的な方針にもとに、意味・文型・用例を記述する試案が示され、類義語間の異同を明らかにしえている。

(5) 第3章から第6章の考察においては、第2章で見出された7つの範疇的意味および移動構造のタイプが有効な手がかりとなっており、本論文全体を有機的にむすびつけようという意図がおおむね成功している。各章で分析される種々の現象には既に先行研究で指摘されているものもあるが、本論文においては、範疇的意味という概念を用いた一貫した理論的立場にもとづいて改めて捉えなおされており、これまでの研究にはみられない意欲的な取り組みである。

以上の諸点が高く評価された一方で、各委員からいくつかの疑問点や改善すべき点が指摘された。それらのうち主たるものは次の点である。

（1） 術語の定義が必ずしも明晰になされていないものがあり（「移動動詞」「動作動詞」「二側面動詞」「方向」「位置変化」「限界性」など）、考察範囲に対する疑問が生じたり、議論がわかりにくくなっている箇所がある。

（2） 移動動詞表現として考察対象とする範囲を絞りすぎているのではないか。和語動詞だけでなく漢語サ変動詞も加え、また、「春がくる」「雑念が去る」などの表現も含めて考察するほうが、移動動詞の本質に迫ることができると思われる。

（3）本論でいう範疇的意味は、それをとりだす方法論からの帰結として、格に関する意味が中心となっている。意志性、アスペクト性などについて部分的に触れられているが、それらについての範疇的意味も明示的にとりあげるべきではなかったか。

（4）個々の現象についての考察が詳細になるにつれて議論の客観性を保ちにくくなっているところがあり、適切なテストフレーム等を用いた論証があるとよかった。また、個別の言語事実に向き合いすぎて表面的な記述におわり一般化がうまくなされていないところがある。全体に論述の構造がもう少し精緻であるとよかった。

（5） 研究史の中での本論文の位置づけがやや不明瞭な感がある。本論文の意義をもっと明瞭かつ積極的に述べる姿勢があってもよかったのではないか。

しかし、これらの点は、本論文の学術的な価値やオリジナリティーに対する批判というよりも、本論文の価値を認めたうえで、研究の更なる進展を期待してのものである。

【総合的な判断】

以上述べたように、本論文は、現代日本語の移動動詞について、包括的にかつ深く扱ったものである。批判されるべき点もなくはないが、今後の日本語研究に資するところの大きい論文であることは間違いない。最終試験においては、李氏が本論文の不十分な点をきちんと自覚していて再考し発展させる意欲をもち、その方向性もつかみ始めていることが確かめられた。適確な質疑応答から氏が十分にその力を備えており、本論文をもとにさらなる飛躍が期待できるものと判断された。

学位請求論文の内容、最終試験における応答内容などから総合的に判断した結果、審査委員全員一致で、この研究が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。